

令和2年2月4日

令和元年度 学校評価（自己・全体評価）分析結果について

1 実施にあたって

今年度の学校評価は、教職員評価については「教育の重点」と「経営の方針」に焦点化して実施した。一つの項目に対して「個人評価」と「学校評価」の2通りの評価を主観的・客観的な視点の差異も参考にした。児童生徒と保護者に対しては、昨年度同様の内容で実施し、学校全般について、評価をいただいた。職員に関しては、今年度の重点課題に対して、より明解な評価・課題が示されたと考える。

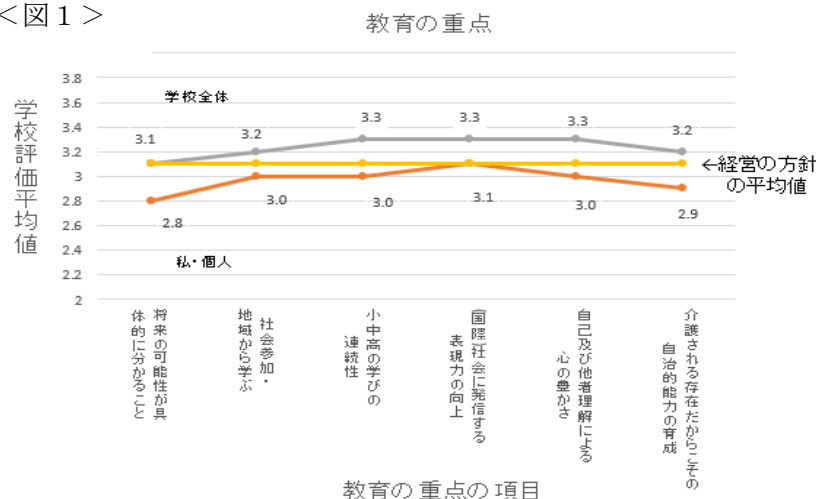
これから各学部・各分掌の年度末反省と合わせ、次年度に向けての方向性や目標を示す手がかりとし、来年度の運営方針に生かしたいと考える。

2 学校評価の分析・考察について

<教育の重点>

- ・概ね3.0以上の評価となっている。
 - ・教育活動全般について、教職員は真摯に取り組んでいる。
 - ・他の領域に比べ、「将来の可能性が分かること」については、低いポイントとなった。
 - ・将来の可能性について、先端技術の進歩と絡めて、大きな視点で考える必要があること。
 - ・学校教育終了後の姿と将来の可能性を、小学部段階から見通すことが重要なこと。
- 「私は」の評価が低いということは、年齢による意識の違いと分析。
- ・「学びの連続性」「発信する表現力の向上」「心の豊かさ」については、高いポイントだった。
 - ・「進路の選択肢や見通しの提供」は、全体を通して「2.6ポイント」と一番低い数値となった。病弱の特別支援学校として卒業の進路や将来における見通しについて、児童生徒を含めて、我々教員が病弱の進路の動きについて情報収集するなど積極的な取組を行う必要がある。

<図1>



- ・「プレゼンや社会の事象を捉えて分析する力」は「2.8 ポイント」だった。自己主張だけでなく、相手を理解しようとする力を育むことは大事であると考えている。
- ・全ての項目で、主語を「学校は」とした方のポイントが「私は」より高かった。
- ・道徳指導教諭を配置し、研修会等積極的に出席し、日常の指導に還元できた。
- ・自己決定、自己責任及び意思や要求も含めた表現力（プレゼンテーション能力）は、特に入院生活が継続する本校生徒にとっては大切という意識がある。
- ・「私は」の評価が総じて低めである。自分の実践に自信をもち、行動することが肝要。

＜経営の方針＞

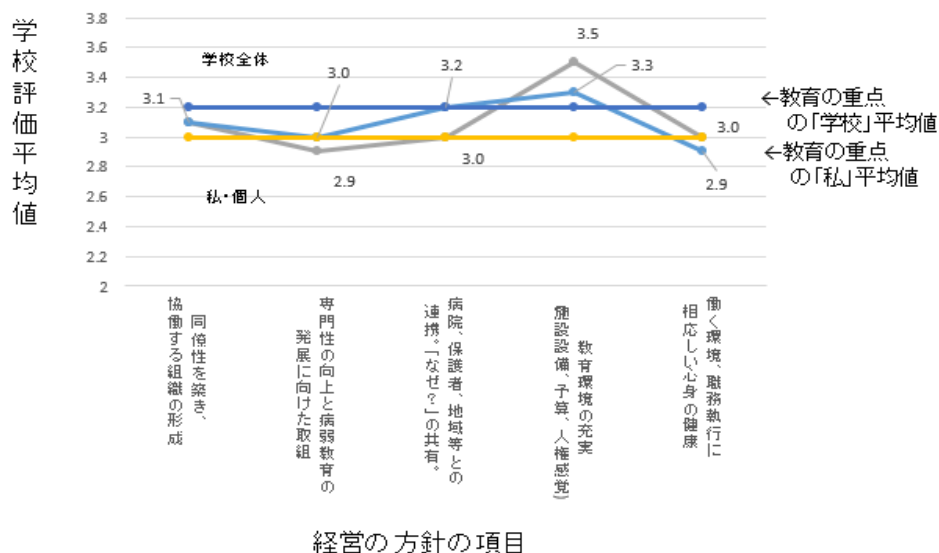
- ・「連携」「教育環境」の領域は、概ね高ポイントであり、教育実践の質の向上にも反映されている。
- ・「専門性の向上」「働く環境」の領域では、「3.0 ポイント」と低めだった。
- ・専門性の向上については、自分の評価が低い傾向。互いの授業を見合い、授業づくり、授業設計の自己研修はすぐにでもできる。身近に上質な授業があることを意識すること。
- ・働く環境は不十分との結果。オーバーワーク、同僚との人間形成による疲弊などあり、多い人数ではないが、「1」の評価が一人でもいることは無視できない。最低限、同僚としての関係性づくりは全員の責務でもある。今一度、同僚としての関係性の在り方についての議論が必要である。
- ・児童生徒の存在を大切にすることは「3.6 ポイント」と高ポイントだったが、適切な呼称については「3.1 ポイント」とそれほど高いとは言えない結果だった。人権感覚を問う設問に大きな差異が見られた。
- ・「適切な呼称」については、「私は」の自己評価に比べ、「学校は」の評価の方が 0.5 ポイントの差で低かった。教員一人一人は気を付けて意識して関わりをもっているが、学校全体では、そうでもないという結果となり、「適切さ」に対する個の意識と客観的な意識に相応の差があると考えている。
- ・互いの授業を参観し合うことについては、今年度の学校評価中最低の「2.6 ポイント」だったため、授業を参観する機会を設けるなどの工夫をする必要がある。
- ・業務量、人間関係、時間の工夫等、職場環境については、「3.0 ポイント」付近が平均値ではあるが、課題があるのではないかと示された。それぞれの業務の精選や効率化を図ること、会議や研修会の持ち方について検討するなど、限られた時間の中で効率的に業務をどう進めるか各学部・分掌を含めて検討が必要である。
- ・「教材準備等、授業にかける時間は十分だ」は「私は」を主語としての評価では個人が「3.4 ポイント」で、それぞれ先生方が工夫して授業づくりの準備を行っていると考えているが、その反面「学校は」を主語としての評価では「3.0 ポイント」であり、業務の平準化等が課題として挙げられた。学校における限られた時間を有効に活用

し、学部・分掌で効率的に仕事が進められるよう組織として取組を進める必要がある。

- ・人権意識の面で、個々の捉え方に大きな差異が見られた。誰一人として、児童生徒の人権を侵害している意識はもっていない。しかし、価値観によっては自覚の有無に関わらず、人権を侵害している部分は存在しているとも捉えられる。顕著な結果は「適切な呼称」に表れた。「私は」は「3.6 ポイント」とできているが、「学校は」は「3.1 ポイント」とそれほどできているわけではないという結果である。自由記述にもあるが、年齢相応とは言えない言葉遣いが見られるということで、それが示す意味を考えてみる必要がある。児童生徒の権利意識を薄めないためには、私たちが、無意識のうちに差別者のカテゴリーとにならないことが重要である。
- ・児童生徒アンケートからは、「学校へ行くのが楽しい」「先生たちは意見をよく聞いてくれる」「先生たちはいろいろ工夫して教えてくれる」「相談にのってくれる」「自分の努力を認めてくれる」等の設問に、満点もしくは満点に近い高得点を付けている。現在の関わり方が負の方向に向かっていないことは確信をもって言えること。だからこそ、子ども扱いしすぎないなどの関わり方が求められ、障がい者は保護される側の人間という意識を払拭して、自立心を育てていきたい。

<図 2>

経営の方針



3 学校運営の視点から

<同僚性について>

- ・学部・分掌・各委員会など教員同士の情報の共有や組織運営上の関わりなど、同僚性や協働性に係わる研修をする機会をつくる必要がある。

<業務について>

- ・令和2年度は、教員数が減り、8月には移転のための引っ越し業務も入ってくるため会議や研修会の持ち方はもちろん、効率の良い運営を目指し、次年度に向けての業務の効率化について引き続き重要な課題であると押さえる。

<教育活動について>

- ・今年度は、突発的な行事がいくつかあったが、教育の充実のためにということを優先し、皆さんの協力のもと実施できた。次年度以降においても、行事や各学部の交流など子どもたちの教育を最優先に考えながら、教育活動の充実に向けて臨機応変に取り組みたいと考える。
- ・令和2年度からは、授業時数が増え、時程も変更になる。今後、教育課程の見直しを含めて、それぞれの児童生徒に合った学びを実践するため、授業改善に向けた取組について検討が必要である。

<外部との連携について>

- ・学校と病院、保護者との連携については、今後も丁寧に行う必要がある。情報の共有を図り、本校の子どもたちのために同じ方向を見て取り組むことができるよう、より一層の充実を図ることが重要である。具体的には、個別の教育支援計画等の実践的な活用が重要である。
- ・病院との連携については、引き続き医教情報交換会を活用した情報交換や各部主事や管理職を通じた情報提供など、情報の共有が図られるよう日常の連携を深め、そのために病院と意思疎通を図り、タイムリーに対応できるよう連携の充実に努める。

<病弱教育としての専門性について>

- ・本校が札幌に移転して分校となっても、「病弱教育」の学校としての役割は非常に大きいと考える。そのため、我々職員は、専門性を高める必要がある。

4 児童生徒評価から

- ・今年度も昨年度と同様の内容でアンケートを実施した。全体的には、大きな落ち込みはなかったが、個々人では、昨年度の数値より下がった児童生徒が5名いた。
- ・「学校や病棟に、何でも話せる友達がいる」では、全体数値が昨年度より下がっており、「1」と答えた児童生徒が1名いた。学校や病院で児童生徒が伝えたいことや話したいことを伝えることができるような環境を整える必要がある。学校においては、教員同士の情報交換を密にし、病院との児童生徒の情報を共有する必要がある。
- ・「将来の夢や卒業後（進学や生活）に向けた学習をしている」については、昨年度に比べて数値が下がっており、卒業後の不安はまだ大きいと考えている。進路指導については、各学部・分掌においても引き続き取組を進める必要がある。今年の8月には札幌へ移転するので、職場開拓や就労支援について情報収集を進める必要があるため、関係する先生方や分掌と協力して行う必要がある。

- ・「できるだけ本を読むようにしている」の項目は、昨年度に比べて数値が上がっているが、全体では一番低い数値となっている。「ビブリオバトル」や「読書の時間」など児童生徒が多くの本に触れられる機会を設定していきたい。

5 保護者評価から

- ・今年度の保護者アンケートは昨年度と同様の項目で実施した。人数も変化しているため単純に比較できないが、参考数値として捉えた。
- ・全体的に今年度においても高い評価をいただいており、6項目で昨年度より数値が高くなっている。今後も保護者のニーズに応じた学校づくりを目指し、指導や支援の充実に努める必要がある。
- ・本校の保護者は、なかなか学校に来ることが難しいご家庭が多いため、保護者への説明に関して、日頃から丁寧に分かりやすく行い、学校と各家庭で情報の共有を図る必要がある。

6 結論

教育の重点	結論・課題等	備 考
将来の可能性が具体的に分かる	・社会人基礎力を活用するなど、指導の方向性の共有を図ることができた。 ・科学技術の進歩により、多様な進路が具体化していることを念頭に、進路や社会参加について検討を深め、行動することが求められる。	・テレワーク、e スポーツ、SNS 等の活用、先進的な情報の収集など
社会参加、地域から学ぶ	・交流及び共同学習の拡大、遠隔を利用した共同学習、地域への貢献的な活動の実施など、多岐にわたる実践に取り組むことができた。	・就労体験学習、合同授業、遠隔を利用した交流、ロボットプログラミング選手権への参加等
小中高の学びの連続性	・学部間の連携をとり、指導計画を練ることができた。どの学部においても、高等部卒業時の進路、社会参加を念頭におきながら、指導の連結をより充実させる必要がある。	・個別の指導計画・支援計画の活用、教職員のビジョンの共有
(国際) 社会に発信する表現力の向上	・自己表現、内面の育成を意識した実践に取り組んだ。 ・機器の進化により、手の届く範囲に世界が広がり社会参加の可能性が現実的に広がったが、スキルだけでなく、何を発信するかという表現力は欠かせない。国際化に向けては英語教育の充実も重要な課題となる。	・英検への取組、ビブリオバトルや意見発表会の実施、英語科の指導の創意工夫等

(国際) 社会に発信する表現力の向上	・自治的能力の育成とも関連するが、他者の支援を受けて人生を送る以上、意思や要求を明快に言語で表現できる力が必要。介護する人を説得できるような表現力は自立において有効と考える。	・英検への取組、ビブリオバトルや意見発表会の実施、英語科の指導の創意工夫等
自己及び他者理解による心の豊かさ	・道徳教育基本計画を立て、研修会に積極的に派遣して指導の工夫を行った。自己主張、他者理解、正義感やマナーなど、各年代相応に指導がなされた。社会参加や就職の重要な手段となるICTの活用については、利便性に潜む危険性やマナーなど、重要な教育課題として取り上げる必要がある。	・遠隔を利用した他校との道徳の合同授業、外部の機関と連携した学習の積極的な実施等
介護される存在だからこそその自治的能力の育成	・継続的入院しながらの社会参加は可能な時代となってきたが、介護者は必ず必須となり、支援を求めなくてはならない。その意味を理解し、自己決定、支援を受けての行動、自己責任を伴う行動ができるよう、学校教育で果たす役割がある。プレゼンの力とも重なるが、育てるべき力を見通せた1年だったと言える。	・児童生徒会活動、スクールイメージ・校歌・校章づくり、新校舎の一部デザイン決定への参画等

経営の方針については、教育の重点を達成させるために有効な設定であった。しかし、人権意識や働く環境の整備など、改善の余地はいくつか挙げられた。この点の改善が見られたとき、リスペクトし合える教職員と児童生徒の関係性、教職員間の同僚性の高まりを前提とした協働する組織の盤石化、授業を見合うなど比較的容易であり、効果も高い取組の実施などによる専門性・授業力の向上など、生かすべき点が挙げられたことが重要な成果となった。

学校教育目標	今年度の評価
自らの可能性を生かし、心豊かに生きる人を育てる	いくつかの大きな課題もあるが、教職員評価、児童生徒評価、保護者評価の分析により、概ね達成できたと評価する。